

## 海誓山盟

深海 亮・著

二巻、終了後のお話です。

窓の外では雪が音もなく降り続けている。月の見えない暗い夜だ。

蘭瑛と翔珂は多くの会話はせず、酒杯を手に、共に静かな時を過ごしていた。

白雪は雪花を思い出させる。あの日の、悲しい夜の出来事を蘭瑛は一生忘れないだろう。雪花の泣き崩れた姿を。駆け抜けて行った美桜の背中を。絶望に涙しながらも、美桜を慈しみ、見送った翔珂の姿を。三人の元に、蘭瑛は駆け寄ることもできなかった。呆然と立ち尽くしていた志輝も同様だろう。蘭瑛たちが決して踏み込むことのできない、彼らの絆。ほんの僅かな邂逅。けれどもあの時、蘭瑛は永遠を感じた。永遠なんてものはこの世にない。けれどもあの光景は、彼らの想いは、永遠のものだと感じたのだ。

蘭瑛は翔珂の横顔を視線だけで見上げる。

蘭瑛が後宮を出た経緯は勿論聴取された。しかし翔珂は、あの夜の出来事を多くは語らない。美桜に続き、自ら命を絶った邑璃妃のことも。

邑璃妃も美桜と同じく、強く優しい女性だった。蘭瑛が知っている彼女は、淑やかで、物静かで、冷静沈着。一体どのような思いで、あの炎のような心を隠していたのか。周囲には一切気づかせなかった。本当にとんだ詐欺師だ。

邑璃妃は美桜を守ろうとしたのだと、翔珂が教えてくれた。彼女なりの償いであったと。邑璃妃と美桜。二人は出会うべくして出会ったのだろう。二人は時を待っていた。来るべきその時を。そして終に、二人は共に為し遂げた。

それに比べて自分は、と蘭瑛は翔珂から視線を逸らした。酒杯の水面を揺らして臉を伏せる。

自分は何もできなかった。もしあの時、自分が美桜を止めることが出来ていたなら、今ある未来は変わっていたはずだ。彼らに違った未来を見せることができた。

思いつめた表情で謝ろうとした蘭瑛を、雪花は頭を振って制止した。

『あの時走り出したのは、姉の意思です。……おそらく、誰も姉を止められなかったと思います』

そう言った雪花の顔は、寂し気だった。

凶華——そう呼ばれる蘭瑛は自分のことが心底嫌いだ。誰かを守れるように変わっていこう、そう心に決めたのに、結局は誰も守れずにいる。静姿に美桜、邑璃妃。誰一人、守ることができない。誰も蘭瑛を責めないから猶更心が潰れそうになる。

志輝と珠華だってそうだ。蘭瑛の母の行動が志輝たちの家族を苦しめたのに、二人は何も蘭瑛に言わない。無事で良かったと、ただ蘭瑛の心配をしてくれた。

胸がひどく苦しい。自分は彼らに何を返せるだろう。何ができるのだろう。

「蘭瑛。眉間に皺が寄ってるぞ。口に合わないか？」

翔珂に顔を覗き込まれ、蘭瑛は翔珂の顔をじっと見つめ返した。

「な、なんだよ」

どうして皆、こんなにも優しいのだろう。どうして自分を恨まないの。どうして罵らないの。心の奥で、蹲った臆病な自分が叫ぶ。

でも、それを口に出すのは卑怯だ。自分を擁護する言葉が欲しいがために、言いたくはない。どうして、と思いつつも分かっている。行き場のない感情の矛先を、間違えてはいけないと彼らは分かっているからだ。彼らは生まれた時から、どうしようもない運命に振り回されている。だからこそ、間違えないように生きている。

蘭瑛は嘆息すると、酒を一気に呷った。

「翔、お代わり」

誰もいないことをいいことに、蘭瑛は遠慮のない物言いで酒杯を翔珂に差し出した。

「不味いんじゃないのか？」

「違うわ、美味しいわよ。ただ、考え事しててちょっともやっとしたの」

「そ、そうか」

翔珂は首を傾げながらも酒を注いでくれる。誰に対しても、平等に優しい翔珂。人間味溢れる自分たちの王。翔珂にとって唯一の女性は、彼の心を奪ってってしまった。もう誰も、美桜には勝てない。でも——。

「ねえ、翔」

「なんだよ」

「言っておくけどわたし、案外ねちっこいから」

辛くても傍にいよう。美桜を想い続ける翔珂を、蘭瑛は好きになったのだ。はじめから美桜に負けている。ならせめて、この身がある限り翔珂を支えていこう。美桜にはできなくて、蘭瑛にできること。美桜の分まで彼を愛そう。彼が少しでも、幸せを感じられるように。

「だから、覚悟しておいてよね」

そう宣言すると、翔珂は何故か顔を青くさせた。

「え、俺、なんかしたか？ 盛ったりしないよな、下剤とか……」

蘭瑛は目を瞬かせた後、それはそれは美しい笑みを浮かべた。決意表明ともいえる蘭瑛の告白は、悲しいかな、全く届いていなかった。

蘭瑛は立ち上がり、灰色の目を据える。

「そうね。したわね、思いっきり今。分かったわ、陛下は下剤をご所望ね。今から調合してくるから大人しく待っていてちょうだい」

「っおい！ ちょっと待て！ 明明、明明来てくれ！」

席を離れ別室へ移動する蘭瑛に、翔珂は焦った声で明明の名を叫ぶのであった。